いばきた

デザイン
プロジェクト

IBA-KITA
DESIGN
PROJECT

茨木市

茨木市 都市整備部 北部整備推進課

〒567-8505 茨木市駅前三丁目8-13
電話：072（620）1609
ファックス：072（620）1730
メール：hokubuseibi@city.ibaraki.lg.jp

次なる
茨木へ。

2020/4 ── 2021/3

大岩いも掘り園 編

茨木市北部地域の課題解決を目指して。

茨木市は、大阪市や京都市へアクセスしやすく、大学・高校をはじめとする教育機関、ショッピングモール、商店街、飲食店などの商業施設も充実していることから、関西圏の中でも「住みよいまち」「利便性の高いベッドタウン」として評価が高く、茨木市全体の人口推移は毎年増加傾向にあります。一方、北部山間地では、若者を中心とする人口流出と農林業従事者の高齢化により、産業や環境保全の停滞が続いています。特に問題となっているのが、山間地の「深刻な過疎化」です。茨木市の全面積の約半分が山間地にあたりますが、市街地の人口に対して約1%という統計もあります。

このような課題解決に向けて、地元で暮らしている方々をはじめ、市内外のさまざまな人たちが北部地域に関心を持ち、みんなで考え、一緒に取り組んでいくことができるフィールドを創出するため、平成30〜令和2年度の3年間を実践期間として取り組んできたのが、いばきたデザインプロジェクトです。来年度以降は、このプロジェクトで培った地域との関係性を基盤に、より発展的な取組みを行っていきます。

課題解決に向けた「仕組み」をデザインする。

プロジェクトチーム

大学、専門識者、クリエイターをはじめ、
地元地域の方々や北部地域で活動する
団体と連携を深め、協働の体制をつくる

北部地域と密接につながり
フィールドワーク、取材、編集などの活動を行う

活動を通じてプロジェクトの「仲間」をつくっていく

課題解決に向けて
みんなで意見やアイデアを出し合える「場」をつくる

- 地域課題の「見える化」を行い、みんなで共有する
- 歴史、文化をはじめ、自然環境、人々の暮らしなど
  地域資源や魅力を再発掘していく
- 北部地域の未来図を一緒につくっていく

過程と成果を
情報発信 <> 情報共有

北部地域で
暮らしている方々

市内外で
活動している方々

行政と地元の方々との連携、多分野の人たちとの協働を推進させ、みんなと一緒に課題解決へと向かっていきたい。

茨木市北部地域の課題解決に向けた取組みを円滑に推進させ、着実に成果へとつなげていくためには、地元で暮らす方々と行政との親密な連携や、地域づくりに関心の高い多分野の人たちとの協働の体制づくりが重要です。いばきたデザインプロジェクトでは、これらの三者が、しっかりとチームを組み、地域資源や魅力の掘り起こしをはじめ、フィールドワークによるデータベース化、情報の可視化と発信、ネットワーク構築を行っていきます。そのプロセスで得られたノウハウを最大限に活かし、さまざまな人たちが使いこなすことができる「新しい仕組み」をデザインしていくことを目的としています。さらに、プロジェクトの活動が市内外の多くの方々に伝わり「参加することが楽しい！」「関係を持つことが楽しい！」と感じていただけるフィールドづくりを実践し、活動人口の拡大に寄与していきたいと考えています。

いばきたデザインプロジェクトは、2018〜2020年度の3年間を実践期間としており、期末ごとに冊子を発行します。本冊子は2020年度版にあたり、「大岩いも掘り園」を対象とした課題共有、活動の過程や成果を編集したものです。

地元地域が一丸となって支え続ける
茨木市を代表するレクリエーションスポット「大岩いも掘り園」。

昭和47年に設立し、50年近く、市内外の人々から愛され続ける、茨木市を代表するレクリエーションスポット「大岩いも掘り園」。令和2年の秋には12,000人もの人たちが訪れた。毎年、9月中旬から11月上旬の期間（土・日・祝）に開園。約8,000平米の広大な敷地に、ホクホクとした食感と甘味が特徴の「紅はるか」が約20,000本植えられる。粘り気が少なく、さらっとした土壌なので、サツマイモが美味しく育つことに加えて、いも掘りがしやすく、初心者でも気軽に楽しむことができる。都会生活で土に触れる機会が少なくなった子どもたちの「遊び場」として利用するファミリー層も多い。売店では、地元の農家が育てた採れたての野菜やお米をはじめ、おにぎりやおでんなどを販売。また、憩いのスペースとして「喫茶おおいわ」が併設されている。運営は「大岩観光農業組合」。地域への貢献、市民への開かれたサービスを追求し続けている。

大岩いも掘り園の1年間

5月

苗植え　土を盛って畝を作り、サツマイモの苗を植え付け、乾燥防止・成長促進のためのマルチを張る。

6月 — 9月

草引き　開園までの間、生い茂る雑草を定期的に刈り取る。炎天下の中、中腰で作業するため、かなりの重労働。

9月中旬 — 11月初旬

開 園　来場者の案内や誘導、販売などを、地域総出で行う。期間中に1万人を超える集客を誇る、いばきた随一のスポット。

11月

閉 園　いもを掘り終わった場所を順次駐車場として併用していくため、閉園時には畑のほとんどは更地となる。来シーズンの訪れを待つ。

歴史・沿革

1972-2010 ／ 昭和47年～平成22年

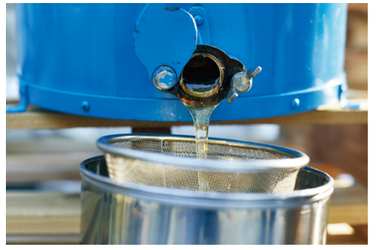
- 昭和47年、茨木市内の保育園、幼稚園児のいも掘り体験場所として開園。茨木市農林課からの要望・依頼を受けたことが契機となる。組織としては「農事研究会」とし、有志10名ほどで発足する。
- 「大岩観光農業組合」通称：大岩いも掘り園として組織改編。
- 平日は、保育園、幼稚園児を、土日祝日には、一般客も受け入れるようになる。おでん、おにぎり、野菜も販売。また、バーベキューの提供やシイタケ狩りも行っていた（現在では廃止となっている）。
- 平成22年度までに組合員の増減はあったが、主に、大西信雄氏が代表を務める。

2011-2017 ／ 平成23年～平成29年

- 新しい代表者として、峯義昭氏が就任。大幅な組織改編、規模拡大がなされた。
- 圃場（畑）は、新規開発も含めて8つ（面積：約8,000m²）、約20,000本のいも苗が植えられた。
- 駐車場を拡大し、大型観光バス、マイクロバスも駐車可能となる。
- 喫茶店の設置、および売店、簡易トイレ等も拡充される。
- 組合員数も男女合わせて30数名となり、組織も組合長、副組合長をはじめ、総務グループ、生産グループ等に編成された。

2018-2020 ／ 平成30年～令和2年

- 平成30年から連続で11,000人を超える来園者数となる。
- 令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大のため、開園が危ぶまれたが、感染対策を行い、たくさんの方々が来園。
- 現在の苗の種類は、「紅はるか」。現組合員数25人。



新たな地域資源を生み出すために
大岩の地で「養蜂」を続ける。

大岩にて「週末養蜂」を実践する浅井正和さん。春から夏にかけて採蜜される「大岩産の蜂蜜」は、濃厚でありながら、さっぱりとしてフルーティな味わい。蜂蜜づくりを通じて、地元の方々との交流を図り、地域活性化へとつなげていく。その試みとして、無添加・蜂蜜石鹸「おおいわのはちみつ」を商品化。今後は、「喫茶おおいわ」にて蜂蜜を使った新メニューを充実させるなど、新たな地域資源づくりを目指している。

市民グループ 遊来亭 代表

浅井 正和さん

培ってきた養蜂の経験を活かして、
地域の活性化へとつなげていきたい。

オーストラリアのタスマニア島で一年間生活する機会があり、そこでタスマニア産のはちみつに出会いました。その魅力に引かれ、元々養蜂に関心があったのもあり、日本に戻ってから趣味で養蜂を始め、縁あって大岩の地で養蜂を手掛けることになって3年目になります。これを機に「喫茶おおいわ」の運営も任せていただくことになりました。私は、市街地と北部地域の中間にあたる安威で暮らしています。大岩と深く交流することで、あらためて少子高齢化や若年層の流出といった課題に直面しました。ぜひ、自分を受け入れてくださった地域の方々への「ご恩返し」がしたい。趣味ではじめた養蜂が、大岩いも掘り園をはじめ、大岩の地域を元気にするための活動へと進化させることができないだろうかと考えるようになりました。蜂蜜は、そのためのコミュニケーションツール。「喫茶おおいわ」にて蜂蜜を使ったメニューを充実させたり、大岩のプライベートブランドを開発するなど、地元の方々と一緒になって地域を盛り上げていく方法を模索中です。取り組みのプロセスが先進事例となり、市内外の人たちから「関係を持ちたくなる地域」として周知されるよう、架け橋としての役割を担っていきたいと思っています。

浅井 正和（あさい まさかず）

1970年　大阪府茨木市で生まれる。2004年に家族3人で語学留学の形をとり行ったオーストラリア・タスマニア島で天然酵母パンや純粋タスマニアンハニー・オーガニック食材に目覚める。帰国後、タスマニアで出会った方の父（養蜂家）から指導を仰ぎ、高槻市で西洋ミツバチ週末養蜂をスタート。3年前からここ大岩の地でも地域活性化の目的で養蜂を行っている。

「大岩いも掘り園」と並ぶ地域資源、
茨木市を代表する恒例行事「大岩太鼓巡行」。

大岩太鼓は、享禄元年（1528年）からはじまり、約500年の歴史を持つ。しかし、太鼓巡行は、明治17年から約100年間途絶えてしまっていた。地域の伝統行事を継承させようと、昭和60年、峯義昭さんを中心に「大岩太鼓保存会」を結成。約100年の時を経て「大岩太鼓巡行」を復活させた。以降、大岩太鼓の活動は、茨木市を越えて、大阪の鶴見花博でのパレードをはじめ、京都市からの要請でアメリカのボストン、ミネアポリス、ニューヨーク、ロサンゼルスなど海外でも披露するまでに至った。

大岩太鼓 保存会会長

峯 義昭さん

「奉仕の精神」を貫き通すことが、
地域と市民の喜びにつながっていく。

大岩いも掘り園は、昭和30年頃まで大きな「山」であった土地を地元の人たちが集える多目的グランドとして開拓したことが起源。その後、昭和47年より、いも掘り園をはじめることとなりました。そこに至る経緯には、携わった方々の相当な尽力、ご苦労があったとお聞きしています。私が代表を任されたのは、今から10年前。引き受けたからには、大岩に暮らす人たちの誇りとなる場所にしていきたいという信念のもと、共感してもらえる仲間たちとともに日々邁進してきました。何よりも大切にしたのは「奉仕の精神」。ビジネスとしての事業採算性やマーケティングで思考するのではなく、来園される方々が本当に満足していただけているのか、そのことがスタッフにとっての喜びにつながっているのか、あるいは、地域を元気にするために貢献ができているのかを徹底的に追求してきました。これらを実現していくためには、理論や言葉だけでは、誰も付いてきてくれません。そのためには、まず自分が率先して行動を起こすこと。そして、労を惜しまず協力してくれた人たちに、心から感謝をすること。みんなで汗をかいて、みんなで達成感を分かち合う。その姿が多くの人たちに伝わって、大岩いも掘り園が市民のみなさんに深く愛され続けているのだと確信しています。

峯 義昭（みね よしあき）

昭和12年、大岩に生まれる。会社勤務の傍ら大岩太鼓の復活のために活動し、昭和60年、有志をつのり復活、昭和62年に保存会を結成、会長として現在に至る。自治会長、公民館長などを歴任、現在は大岩パトロール隊長、石河地区地域安全センター長を務めている。